

大江戸色紙

大吉捕物控

われた男◆多岐川 恭



飼われた男——お夏太吉捕物控——

昭和五十七年三月二十五日 初版発行

著者 多岐川 恭

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)二〇五一(編集)
〇三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内

電話 〇六(三一二)一五七三

印刷所 東京研文社

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© K. Takigawa 0093-505110-3214

Printed in Japan

目次

太吉売り出す	5
突き当った男	31
お夏の恋心	55
飼われた男	79
二人で芝居を	105
太吉冬ごもり	131
花かんざし	157
昔の仲間	183
田舎の親爺	207
いつか見た顔	231

装画／堂 昌一
装帧／長谷川純子

飼われた男

— お夏太吉捕物控 —

太吉売り出す

「ちきしょう、悪いところへ」

と、お夏が言ったのは口の中だった。舌打ちすると、一目散に人ごみにまぎれ入ろうとしたが、そうはゆかなかった。

「いよう、お夏じゃねえか。久しぶりだなあ」

と、あたり構わぬ大声を出しながら、勢よく走り寄った男がいて、まわりの者がびっくりしているうちに、お夏のたもとをつかんでしまった。これでは逃げられない。

「おや、太吉のにいちゃん、妙なところで会うねえ」

お夏は何くわぬ顔で、ニツコリして見せた。

お夏はちょうど、通行人から財布を^す取り取ったところだった。物に蹴つまずいたふりをして抱き付き、その拍子に細い器用な指を相手のふところに入れ、財布、紙入れ、巾着の類いを頂戴して、たもとに落すのが、お夏のやり口で、ヒモなんぞがくっついていても、手の内にかくし持った剃刀で切ってしまう。

やり口はありきたりだが、そこは手練が物を言う。しくじったことは、めったにない。

ただ、お夏は仲間とは組まないから、掏った途端に仲間に渡す早業はできない。

だから、太吉のような男に、現場を見られたら、困ったことになる。

いまがそうだった。太吉はどうやら、どこでお夏を見付けたのか、ずっと尾けていて、お夏の一挙一動に目を光らせていたらしい。

ほかの通行人のたもとやふところに、押し込むこともできなかった。観念したほうがよさそうだっ

た。

「お夏、ちよいと話があるから、そこらまで付合ってくれ」

と、太吉はニヤつきながら言った。

「にいちゃん、わたしやこれから、用があるんだよ」

「なあに、手間は取らせねえ。甘えものでもどうだ？」

「たもとを放しとくれよ」

「おっと、こいつは悪かったなあ」

お夏は、どうともしやがれという気持ちになった。

入った水茶屋の奥に、小座敷がある。そこから大川が見える。すぐ左に両国橋。きらきらしい光に満ちた、春景色だ。

例の財布は、お夏のとに入ったきりだ。捨てる折が、遂になかった。

お夏はそいつを、太吉の前にほうり出し、黙っていた。お夏は十八、取り立てて美しいというのではないが、眉目がクッキリして、唇が少し突き出したように鮮やかな娘だ。

お夏で一番美しいのは、頬つべたかもしれない。なにしろ、憎めない顔をしている。

太吉がそのお夏の顔を見ながら、溜息をついた。

「まだ胸^{むね}摸^もをやっていやがるのか。いいかげんにしねえか」

「わたしに意見をしようってのかい？ 無駄さ。それより、こんなところに連れ込んで、どうするつもりだい？ ハッキリしないのが、にいちゃんの悪い癖さ。縛るなら縛りなよ。渋茶を飲んで、餅やお団子をパクつくことはないんだ」

「おれに縛られてえか？」

「何を言ってるんだ。縛りたいやつがいるもんか。とりわけ、にいちゃんなんか縛られたくはな

いよ。どうせなら、捕り物上手の、名の知れた親分に……」

「抜かしやがったな」

と、太吉は目をいからせたが、実はそれほど腹を立てたわけではない。

「お夏、頼まれてくれ」

「おや、何をさ？」

「それはいまから言う。やってくれたら、きょうのことは見逃してやる。どうだ？」

「ふうん」

と、お夏は思案顔になった。

「厭だと言ったら？」

「知れたことだ。ギユウギユウに縛って、番屋にほうり込んでやらあ」

「幼なじみをふん縛って、さぞかし寝覚めがいいこたろうねえ。なにさ」

「おれだって、おめえを縛りたくはねえから、頼んでいるんだ」

「中味がわからなくちゃあ、厭とも応とも言えないじゃないか」

「それもそうだな。いや、おめえになら、むずかしくはねえこた。おめえと同業の、女掏摸を探してもらいてえ」

「女掏摸？ わたしに仲間を売ってえのかい？」

「いいから、まあ聞いてくれ」

二

日本橋瀬戸物町に、伊勢屋という干魚の間屋がある。干魚のほか、海藻類も扱っているが、まず中

どこの店だ。

その伊勢屋の若主人、福之助が親類の病氣見舞に、十軒店へ出掛けたが、本町三丁目の大通りに出たところ、赤犬が一匹、吠えながら走ってきた。

子牛ほどもあろうかというすごいやつで、福之助はギョツとして立ちすくんだが、その時、前を歩いてた女が、悲鳴を上げて走り戻ると、いきなり福之助にしがみついた。

赤犬は襲いかかつてはこず、横を走り抜けて行ってしまった。

女はなおしばらく、福之助に抱きついたような形でいたが、赤犬の姿が見えなくなると、やっと離れて、きまり悪そうに、福之助に詫びを言った。

女は浣皮のむけた、小ぎれいななりの年増だった。

財布を掏り取られていると気付いたのは、店に帰ってからだった。思い当るのは、その女しかない。あの赤犬は、女が飼っているやつかもしれない。

話をそこまで聞くと、お夏は笑い出した。

「お？ おめえの知ってるやつだな？」

「知ってるよ。お竹ってアマさ。赤犬を使うやつは、お竹しかないから」

「そうかい。こいつは運がよかった」

「お待ちよ。それでどうしろって言うんだい」

「知れたことじゃねえか。そのお竹を捕え、財布を取り戻すのよ。掏られたのが、ついおとといの昼下りだから、金はろくに使ってもいめえ。お竹の居所を教えてくれ」

「お断わりだね」

と、お夏の返事は二べもない。

「なんだと？ おい、お夏」

太吉は本当に怒りだしたようだった。

「おとなしく出たから、甘く見やがったな。幼なじみもクソもねえ、ひっくるるぜ。おれはこれでも、十手を持ち、天下の御法を破るやつは容赦なくやっつける男だぞ」

「じゃあ、そうおしよ、さあ」

と、お夏は両手をそろえ、前へ突き出した。華奢で、細工物のようにみごとな手だ。太吉はタジタジとなった。

「……番所へ突き出しなよ、さあ。あたしゃね、仲間は売らないよ。お竹とはろくろく口も利いたことではないけれど、同業のよしみさ。仁義だからね。あいつは仲間を岡っ引に売り渡したアマだと、うしろ指を差されるくらいなら、牢屋のもっそう飯をくったほうがマシさ」

「チェッ、聞いたふうなことを抜かしやがって」

と、太吉はいまいましそだが、お夏を到底縛れないのを、ちゃんと読まれているから、仕末が悪い。

太吉は肩を落した。

「仕方がねえ。おめえの言い分も、わからねえのじゃねえ。じゃあ、お竹に縄をかけるのはあきらめようよ」

「おや、あきらめ様が早いね、にいちちゃん」

「何を言いやがる。その代わり、おめえがお竹に言っつて、財布を返させろ。財布ごと、そっくりだぞ。そうすりゃあ、見逃してやると言いな」

「ウンと言わないよ、お竹は。せっかく稼いだものを返すなんて……欲の皮の突っ張ったアマなんだよ。わたしは怨まれちまう」

「厭か」

「にいちゃんには済まないけれど、やっぱり厭だね。お縄になるよ」

「ちくしょうめ。弱味に付け込みやがって」

「金はどのくらいだい？」

「小判が二枚、あとは小さなので、合わせて三両足らずだそうだ」

「小判を持ち歩くのかい？ 大層なもんだな。その伊勢屋は、よっぽど金持ちだね」

「そんなことは、どうでもいいや。……わかった、おめえには敵^{かな}わねえ。実はな」

福之助は、金は返らなくてもいいと言っている。ただ、財布の中に、鍵が一つ入っている。蔵の鍵だが、その鍵がないと、蔵の錠前が開けられない。蔵の中には干魚やなんぞ、売りものばかりギッシリ入っていて、金目のものは何もないから、鍵を盗んでもなんにもならない。無用の長物だ。だから、鍵だけは是非、返してもらいたいと言っている。

「なあんだ、はじめっからそう言っただけじゃないか、にいちゃん」

「福之助はそうだが、おれはそんなことじゃあ、気が済まねえんだ。みすみす、三両揃りやがったアマをふん縛られねえのは、岡っ引として口惜しくってたまらねえじゃねえか」

「わたしや、鍵のことは引受けるよ。金はあきらめなよ、にいちゃん。それでも、半分くらいは返すのが身の為だとは言ってるけどさ」

三

太吉の親父は桶屋で、柳原岩井町の横丁に住んでいた。お夏の家は煮豆屋で、筋向いだったから、餓鬼の頃はよく遊んでいた。太吉とお夏は六つ違いで、まるできょうだいのようなようだった。太吉はお夏をいじめもしたが、庇^{かば}いもした。

お夏の一家は、どこかへ引越してしまつたが、それはお夏が十二、太吉が十八の時だ。

太吉は厭々ながら、親父の仕事を手伝っていたが、辛抱し切れずに飛び出した。

何をしても長続きせず、またろくな職もなく、いっぱい悪い遊びも覚え、ずるずると深みにはまろうというところで、松兵衛という岡っ引に拾い上げられた。

子分になって修業を積み、筋がいいとはめられもしたが、しくじりもやつた。

松兵衛は早死にして、跡目は一の子分が嗣ぎ、太吉はおっぱり出されたが、旦那の羽田孫一に泣きついたところ、新參の回り方、米倉儀助という旦那に引き合わせてくれた。

十手捕縄はもらつたが、旦那がそもそも、若手ではあり、泣かず飛ばずで、役目にもあまり熱心ではない。従つて太吉も、一向目ばしい働きができないというわけだった。

お夏のことは、ずっと忘れず、気にしていたが、二年前の夏、八辻ヶ原の盛り場で、ひょっくり出会った。

それから、ちよいちよい会っていたが、年頃になつたお夏を見る目は、普通り、兄の目だ。

お夏の身の上話は、大方嘘っぱちで、居所もはっきりしない。会う時にはお夏のほうから、大伝馬町の裏店の、太吉の住いに來ていた。

お夏の稼業が掏摸だとわかつたのは、去年の春先のことと、臭いとは思っていたから、ある日、太吉を訪れての歸りを尾けてみると、一仕事やつた。

追いかけて、首根っ子をつかまえて家に連れ戻し、これから決してしませんと言わせたが、しおしおとしていたのは束の間で、歸りぎわに赤い舌を出して、逃げ出した。

以後はめつたに顔を見せなくなったが、全く寄りつかなくなったのでもない。会えば、あれはすっぱりやめた、などと言う。

だが、太吉の勤では、やめていないのだ。

お夏の居所を突きとめたところ、両国橋町の裏通りで、狭苦しい家に、女ばかり四、五人で住んでいた。近所の者の話では、広小路に小屋掛けで、手踊りなんかをやっている一座という。

どうやら、そんなことをしながら、裏では掏摸を働いている一味のようだ。尻尾をつかまえてやろうと張り込んでいたが、勤付かれたと見えて、連中はみな、夜のうちに姿をくらましてしまった。

彼等は確かに、両国の小屋で踊りや水芸をやっていたが、その小屋も畳んだ。

それから半年、お夏の消息はわからなくなったが、こんどは向う両国で、若い者に囲まれ、あわやというところに出くわした。若い者は地回りで、お夏は百姓体のおやじから懷中物を掏り損ね、騒がれたらしい。

太吉が割って入らなければ、袋叩きにあうか、寄ってたかつて悪さをされるか、というところだった。

見せた十手が役に立ち、太吉はお夏を引っ立てた。もちろん、本気に縛るつもりはないので、連れ帰って例の通り、さんざん言い聞かせたが、うわの空だった。

そのうちにつまらなくなったら、やめるとか、金持ちからばかり頂戴するんだから、いいじゃないか、などと言っている。悪いことをしているという気持は、あまりない。それより、面白いから続けているようだ。

「掏摸なんぞを働いて、行末はどうなる。それを考えねえのか」

「ちゃんと考えているさ。キツパリ足を洗って、まっとうな、いい男をつかまえるよ」

「つかまえるって、いま、いい男はいねえのか」

「いないね。一体、男は嫌いさ、にいちゃんは別だけどさ。それより、にいちゃんはまだ独り身かい？ 不景気だね。ウジがわくよ」

太吉は返す言葉がなかった。なるほど、お夏より大分不景気だ。女が寄りつくわけがない。

「わたしがいいのを世話してあげようか、にいちゃん」

「うるせえ。ばかにするな。おれより、てめえのことを考えろ。お夏、もうおめえには構ってやらねえから、勝手にしろ」

……二人はそんな仲だった。

お夏は自分の居所を決して太吉に知られないように、用心しているが、ちょいちょい、太吉のところに顔は出す。

それより、あちこちの道ばた、盛り場で会うことが多かった。お互い、なんとなく目をつけ合っている形だ。

このところ二月ばかり、会っていなかったのだが、伊勢屋の一件以来、お夏を見つけようと、鵜の目鷹の目だったのだ。

四

「お竹はひねくれやがって、厭なアマだよ。言い草がしゃくにさわる」

と、お夏が口を尖らしたのは、その翌々日の昼前、太吉の家でのことだ。

お竹に会って話を伝えると、案じたほどでもなく、承知したが、財布は自分の手で福之助に渡すと言い出した。

「そういうことなら、わたしが伊勢屋に行つたって、ふんづかまえやしないだろうからね。鍵を返し、金は改めていただくことにしようじゃないか。お前なんぞに渡そうものなら、どうされるかわかったもんじゃない。どだい、お前の作り話かもしれないんだからさ。その岡っ引が本当にいるのなら、伊勢屋に行つて、わたしが本当に鍵を返したかどうか、確かめりゃあいだろう」